

# Annual

B u l l e t i n

東海大学文明研究所所報 2025

# Report

# 2025

## 平和構築のための文明知を求めて

安達 未菜

文明研究所特任助教

21世紀も四半世紀を過ぎて立ち込める暗雲、平和の輝きが薄らいでいく。超大国が国際秩序を白紙に戻し始め、制御しうはずの法制度を蔑ろにし、領土拡張競争を始めた。民主主義の原理もまた機能不全に陥りつつある。近代人の知恵がこれまで連綿と築き上げてきた原理を放棄し、過去の暗い歴史の淵へと逆戻りしているかのようである。人口減や物価高騰で出口の見えない日本もその例外ではない。SNSを通じてメディア・ポピュリズムが跋扈しつつあることは、誰もが認めるところである。

それでは、文明学は今いかなる役割を担うことができるのであろうか。

福沢諭吉（1835-1901）によって導入された「文明」の概念は、西欧中心の啓蒙思想を意味した。無批判に文明概念を導入したことを詰めているわけではない。むしろ、言葉の意味や使われ方は、時の情勢と連関がある。古典古代の都市国家（*civitas*）に由来する *civilization* という言葉は同一の市民法（*civiler*）に従う文化圏あるいは社会を指し、そこには既に政治や制度の影響が認められないわけではない。

アメリカの文化人類学者アルフレッド・クローバー（1876-1960）は、文明を「行動様式」と定義し、誕生・成長・成熟・衰退する一つの超有機体として捉えた。人間の軌跡の集大成は確かに客観的な体系を生み出している。しかし、彼の門下であるジュリアン・スチュワード（1902-1972）が指摘したように、文明は自然環境の諸条件に適応し続けた結果の産物でもある。特に食糧獲得に直結する技術と組織の形成が社会構造の基盤を決定しており、類似の環境・技術の条件のもとでは類似の文化がパラレルに形成されると唱えた。文明とは、自然環境からの挑戦に対する応答が、あるいは自らが作り出した人間環境から生じた諸問題への対応が、果ては政治社会の歪みに対する是正措置がもたらした結果であると言える。現実から乖離した文明理論は、同時代の世界が直面する諸問題と向き合うべく、やはりその原点に立ち返ることになる。文明学の議論の対象は常に繰り返し、人間の諸営為と文化論の問題へと回帰するのである。

バリ島を舞台とするフィールドワークを通じて文化行為の意味を再解釈したことで知られるクリフォード・ギアツ（1926-2006）は文化を、人間が編み上げた「意味の網」に例えた。行動を規定する諸要素を社会的文脈の中で読み解きながら、その文化が属する社会規範や公定的価値観を分析し、文明の基盤を検討する必要性を訴えた。彼の文化論に政治と権力の視

座を付加したのが、タラル・アサド（1933-）である。アサドは「意味の網」が複数あり、政治と権力、権力構造を正当化してきた歴史、課せられる物質的諸条件に目を凝らす必要性を強調した。文化には社会的権利の不均衡が反映されており、文明もまた支配的な文化・社会による構築物であるという。

ポストコロナ理論を提起したエドワード・サイード（1935-2003）は、西欧で培われた文明論を、支配者側のディスコースであると鋭く非難した。フランスではリアンヌ・ドゥブジ（1929-2021）が、日本では沼崎一郎（1958-）が指摘するように、文明学はポストコロナ理論の台頭により、多様な文化や抑圧された歴史を多角的に分析する学問へと変貌を遂げたのである。サイードは、サミュエル・ハンチントン（1927-2008）の『文明の衝突』を「文明」ではなく「無知」の衝突であったと批判し、文明それ自体が流動的かつ可変的であり、常に周囲の諸文明と混成しながら変容していると解釈した。これは伊東俊太郎（1930-2023）の「文化移入」の言説に相当する。ある文明を構成する諸要素——政治・経済・文化など社会あるいは国家を成り立たせているあらゆる要素——が、他の文明を感化し、相互に変質を繰り返す。島田竜登（1972-）は、A.G. フランクが『リオリエント』で述べた世界経済の先導役としての「横に統一された」アフリカ、アジア世界の復活を挙げ、これからの文明学としてアジア・中東史観の世界的役割を再検討する必要性を説いている。

近年、文明学はポストコロナリズムやジェンダー理論を取り入れ、学問としての刷新を図っている。文明学の手法は学際的、研究対象は地域研究の積み重ねであり、その基底にある学問的素養は哲学である。その今日的意義は、開かれた多文化主義とポストコロナ時代の政治社会のあり方を模索することにあるのではないだろうか。

ポピュリズムの行き着く先は、権威主義的国家の台頭とリベリズムの退潮であろう。権威主義的国家の武力行使をいとわぬ強権的政策が彷彿とさせるのは、帝国主義の時代の植民地政策である。文明研究が批判してきたコロニアル時代への回帰、それはまさにウンベルト・エーコ（1932-2006）の現代社会批判の書のタイトル「歴史が後ずさりするとき」である。今まさに我々が生きているのは「文明の危機」の時代である。文明研究は、学問としての自らの過去を批判的に省察し、その方法論にいつその磨きを掛けることで、時代の潮流に敢えて抗う新たな理論を提供することを要請されているのではあるまいか。

## 文明研究所の研究プログラム

文明研究所は、本学の創設者松前重義博士の意思を受け継ぎ、学内外の幅広い分野からの研究者を結集して、過去の文明、現代文明が抱える諸問題、将来の文明のあり方について総合的に研究する機関です。

当研究所の発足は1959年に遡ります。研究所規則第2条に、「研究所は人類文明という包括的事実を、人文、社会、自然諸科学の協力によって探究し、文明学という新しい学問的理想を完成発展させることを目的とする」と記されている通り、遠大な構想のもとに設立されました。

世紀が変わって2001年には現在の文明研究所に近い形態となり、これ以降「21世紀文明の創出」という研究テーマのもと、2013年度まで、おおよそ3年を1期とする研究プロジェクトを策定し、研究を推進してきました。第1期(2001年度～2004年度)は「現代文明の展開と社会文化的多様性」、第2期(2005年度～2007年度)は「グローバリゼーションと生活世界の変容に関する総合的研究」、第3期(2008年度～2010年度)は「対話と共生を理念とする新しい社会の構築」、第4期(2011年度～2013年度)は「創造すべき21世紀文明」でした。2014年度からは、本学の第II期中期目標(2014年度～2017年度)を受けて、「文明とグローバリゼーション」をテーマとして掲げ、共同研究を進めました。

2016年4月には、総合社会科学研究所の設置にともない、人文学を中心として本研究所の研究活動を再編し、進めていくことになりました。「人文学の活性化」と「本学所蔵の文明遺産の活用」を2つの柱として、共同研究を推進しています。2024年度からは、前者は2件のコア・プロジェクトを設置し、多分野からの学際的な協力を得て、新しい人文学方法論の構築と具体的研究の展開を進めています。2025年度はスポーツ医科学研究所との合同研究会を開催したり、初めて「超領域人文学シンポジウム」を主催するなど、進展がありました。後者についても、以前からのプロジェクトを発展的に再編して2件のコア・プロジェクトとし、本学が所蔵する古代エジプト及び中近東コレクションとアンデス・コレクションそれぞれの保管・整理を行うとともに、本学のマイクロ・ナノ研究開発センターとの連携研究や、展示会の開催などを行っています。

2025年度は、コア・プロジェクト4件を以下の通り推進しました。進捗状況については本誌の報告概要をご覧ください。

- コア・プロジェクト①「現代の要請に応える人文科学方法論の探究」(代表：服部泰)
- コア・プロジェクト②「『さわる』ことから感性の多様性を構想する人文学」(代表：篠原聡)
- コア・プロジェクト③「古代エジプト及び中近東コレクション(AENET)を軸とした学術的研究と公開促進」(代表：山花京子)
- コア・プロジェクト④「アンデス・コレクションの学術的研究と公開促進」(代表：吉田晃章)

## 2025 年度の研究プロジェクト

### 「現代の要請に応える人文科学方法論の探究」 (コア・プロジェクト 1)

本プロジェクトは、2023 年度からスタートしたプロジェクトであるが、2025 年度は以下の 2 班に改編して研究活動を進めた。近年は人文科学（および文系全般）が必ずしも重要視されていない風潮があるが、それは人文科学が現代的問題に即応し得ないという固定観念ゆえであると思われる。こうした批判に対し、本プロジェクトでは現代社会のあり方や諸問題への取り組みを中心に、諸分野を複合した超領域人文学の視点から新たな方法論や知見の獲得を目的に以下の通り活動を展開した。

### 「人新世 (Anthropocene) における人文知」班

服部泰・平野葉一・平木隆之・小川恒夫

星野尚文・矢原充敏・白澤秀剛・李昭知

安部美和・安達未菜・二重作昌満・森園奈央

ペグサム, マナシチャー・守屋朋龍・中嶋卓雄

中村朋子・渡辺青・鷹取勇希・Yan Lespoux

Laiana Wong・Margie Maaka・重村つき

本研究班では一昨年度から「人新世 (Anthropocene) における人文知」をテーマに掲げて研究活動を展開してきたが、3 年目の今年度も以下の 2 点から研究を進めた。

・ Part 1 「超領域人文学をふまえた総合知の研究」今日の人文知の問題を人間営為との相関から複合的に捉える研究

・ Part 2 「環境と QOL の研究」昨今の環境問題に対し、人々が自らの生を満足しながらその対策に向かえる社会の在り方についての研究

2025 年度は、研究班メンバーでの研究会を継続して開催しながら（計 6 回）上の 2 つのテーマの検討を行った。《Part 1》では、広範な領域からの研究について学会報告等を行った。ハワイから研究者を招聘して「国際シンポジウム：第 6 回 文明間対話 - Diversity through different lenses」(2025 年 10 月 18 日)、ならびに「国内シンポジウム：第 1 回超領域人文学シンポジウム」(2026 年 1 月 24 日) を開催した。《Part 2》では、とくに 2025 年 8 月に開催された国際会議 ICICIC2025

において「Environment and QOL」セッションを開催し、研究報告を行った。これらの研究については、最終的には文明研究所の和文誌（『文明』）、欧文誌（『Civilizations』）に論文を掲載するに至った。なお、今年度は 2 名の大学院生が国際会議 ICICIC に参加し、研究成果を発表した。

今年度の研究成果は以下のとおりである。

#### 【学会活動】

[1] 国際会議 ICICIC2025(The 19th International Conference on Innovative Computing, Information and Control)(2025 年 8 月 28 日、北九州国際会議場)、Session “Environment and Quality of Life” を主催（平野・服部）し、口頭発表 6 件

① Toru Hattori, Yoichi Hirano, Takuo Nakashima, Hidetaka Shirasawa, Mina Adachi and Hota Moriya, “Consideration of the Concept of “Environment-Related Quality of Life (eQOL)” in the Local Society – From the Perspective of Human Relationships in the Community”

② Soji Lee, “Reference Point Dependence in Tourist Destination Evaluation: Evidence from a Behavioral Economics Study in Hokkaido”

③ Hota Moriya, “The Relationship between “Community Collaboration” and “Subjective Well-Being–Based on the Concept of Social Capital–”

④ Manasisha Pengsom, “A Study on the Development and Use of Manga and Anime in Society”

⑤ Masamitsu Futaesaku, “The History of Leisure and Recreation in the State of Hawaii, U.S.A., through the Penetration of Japanese Content and Future Prospects for Tourism”

⑥ Yuki Takatori, “Artistic Expression of the Younger Generation in Hawai’i and Their Conceptions of ‘Aloha’Āina”

[2] 国際シンポジウム The 6th Dialogue between Civilizations - Diversity through different lenses (2025 年 10 月 18 日、東海大学品川校舎) を主催し、研究班メンバーおよび招待者で、第 1 部 Ethnic Diversity and Tourism セッションにて 3 報、第 2 部 Symposium にて 3 報、計 6 報の研究報告

① [Keynote Lecture] Kekailoa PERRY, “Diversity and Responsible Tourism in US Occupied

Hawai'i Means Oppression."

- ② [Related Reports] Nana MORIZONO, "Intercultural communication in the context of ethnic tourism"
- ③ [Related Reports] Takuo NAKASHIMA, Soji LEE, "Responsible Tourism Evaluated via Social Media Based on Behavioral Economics"
- ④ [Keynote Presentations] Yuki TAKATORI, "English Domination and Revitalization of Hawaiian Language and Culture -Hawaiian Renaissance in Focus-"
- ⑤ [Keynote Presentations] Laiana WONG, "E Mālama 'ia ka Hawai'i o ka 'Ōlelo Hawai'i / Voices of the Aloha 'Āina: The Hawaiian Language in a Changing World"
- ⑥ [Keynote Presentations] Margaret MAAK, "Advancing Indigenous Research Methodologies: Positioning the Researcher"

International Symposium:  
**The 6th Dialogue between Civilizations**  
*Diversity through different lenses*  
 October 18, 2025 / Shinagawa Campus, Tokai University

Guest Speakers invited from University of Hawai'i at Mānoa

Nowadays, we live in an age of increasing globalization while simultaneously calling for respect for diversity. This situation echoes the conflict between the development of Western-style scientific and technological civilization and traditional cultures rooted in local communities. What significance does preserving local languages and cultures have for humanity on a global scale? In this symposium, we will discuss this issue, focusing on Hawai'i. In fact, there were and have been instances of what has been called the Hawaiian Renaissance. Under this background, we will examine the revival and preservation of indigenous culture from the perspectives of language, culture, education, tourism, etc.

**Session 1 (10:00-12:30)**  
 Research Lecture: *Ethnic Diversity and Tourism*  
 Keynote lecture: Kekailoa PERRY (University of Hawai'i at Mānoa)

**Session 2 (13:30-16:30)**  
 Symposium: *Researching Indigenous Language and Culture: The Renaissance in Focus*

**Panelist:** Margaret MAAKA, Professor emeritus, University of Hawai'i at Mānoa  
**Panelist:** Laiana WONG, Professor, University of Hawai'i at Mānoa  
**Panelist:** Yuki TAKATORI, Assistant professor, Toyo University

**Discussant:** Kekailoa PERRY, Associate professor, University of Hawai'i at Mānoa  
**Discussant:** Kiyoshi TADOKORO, Professor, Toyo University  
**Chair:** Yoichi HIRANO (Tokai University)

Venue: Tokai University, Shinagawa Campus, Bldg. 2 Auditorium (Large Lecture Room 2B101)  
 2-3-23, Takanawa, Minato-ku, Tokyo 108-0074, Japan  
<https://www.a-tokai.ac.jp/about/campus/campus-shinagawa/>

Organizer: Institute of Civilization Research, Tokai University  
 Contact: Yoichi Hirano Institute of Civilization Research (e-mail: yhirano@tokai.ac.jp)

[3] 国内シンポジウム 第1回 超領域人文学シンポジウム (2026年1月24日、東海大学湘南校舎)、研究班メンバーで第1部基調講演、個人発表にて4報、計5報の講演・研究報告

- ① [基調講演] 平野葉一「総合知としての文明研究—文明研究所の歴史をふまえて—」
- ② [個人発表] 中村朋子・渡辺青・平野葉一「身

体知から見たルネサンスの自然認識—レオナルド・ダ・ヴィンチを中心に—」

- ③ [個人発表] 服部泰・森園奈央「身体知から考える環境認知と観光行動」
- ④ [個人発表] 二重作昌満「ウルトラマンシリーズにおける身体知からの一考察」
- ⑤ [個人発表] 守屋朋龍「地域消防における儀式的身体知の意味」

超領域人文学シンポジウム

10:00-11:10  
 基調講演 平野葉一(東海大学文明研究所、客員教授)  
 「総合知としての文明研究—文明研究所の歴史をふまえて」  
 ディスカッション 服部泰(東海大学文明研究所元所長)

11:20-12:20  
 個人発表「諸分野における身体知からの検討の可能性」  
 中村朋子・渡辺青・平野葉一(東海大学文明研究所)  
 「身体知から見たルネサンスの自然認識—レオナルド・ダ・ヴィンチを中心に—」  
 服部泰・森園奈央(東海大学観光学部)  
 「身体知から考える環境認知と観光行動」

13:20-14:25  
 二重作昌満(東海大学総合社会科学研究所)  
 「ウルトラマンシリーズにおける身体知からの一考察」  
 守屋朋龍(東海大学大学院文学研究科)  
 「地域消防における儀式的身体知の意味」

14:40-17:00  
 シンポジウム「語る身体、生成する意味  
 —言葉の身体性から人文知を再考する」

スピーカー  
 田中彰吾(東海大学文明研究所所長)  
 「メルロ＝ポンティの「語る言葉」から考える言葉の身体性と意味」  
 安達未菜(東海大学文明研究所)  
 「ミストラルが生んだ詩と「語る言葉」—プロヴァンスの音と精神文化」  
 今宿未悠(アーティスト)  
 「皮膚感覚から共有経験を立ち上げる—詩・パフォーマンス・メディアアートの各形式が生み出すコミュニケーションとその差異—」  
 ディスカッション 鹿取勇希(東洋大学)

2026年1月24日 土曜日  
 10時-17時  
 参加無料 事前登録不要  
 懇親会17時30分-20時  
 ※懇親会に参加を希望する方はお問い合わせ下さい。

超領域人文学シンポジウム  
 東海大学湘南キャンパス  
 〒259-1292 神奈川県平塚市北金目4-1-1  
 14号館3階304教室  
 主催 東海大学文明研究所  
 助成 2025年度東海大学連合後援会  
 問合せ先 文明研究所助教 安達未菜 adachi.mina.m@tokai.ac.jp

[4] 国内学会 研究班メンバーが国内学会にて2報の研究報告

- ①二重作昌満、「『仮面ライダー (1971)』シリーズ発現の真実の検証と歴史のアーカイブ化」、デジタルアーカイブ学会誌 9 (s2)、s57-s60 (2026年1月10日発表)
- ②二重作昌満、「米国における日本特撮ヒーロー番組の放送から催事開催までの記録と変遷」、第40回(一社)日本観光研究学会 全国大会論文発表会 (2025年12月7日発表)

【和文誌】『文明』、No. 36、2026年(3月予定) 平野葉一、服部泰、中村朋子、渡辺青、「文明論の系譜(1)～東海大学文明研究所と文明論」。

【欧文誌】Civilizations, No. 37, 2026 (刊行準備中、以下は予定)

(1) 文明研究所が主催したシンポジウムに関連する報告・論文

Toru Hattori, Yuki Takatori, Nana Morizono, Yoichi Hirano:

“International Symposium Report: The 6th Dialogue between Civilizations: Diversity through different lenses.

Kekailoa Perry:

Diversity and Responsible Tourism in US Occupied Hawai'i Means Oppression.

Laiana Wong:

E Mālama 'ia ka Hawai'i o ka 'Ōlelo Hawai'i / Voices of the Aloha 'Āina: The Hawaiian Language in a Changing World.

Margaret Maaka:

Advancing Indigenous Research Methodologies: Positioning the Researcher.

Yuki Takatori:

English Domination and Revitalization of Hawaiian Language and Culture -Hawaiian Renaissance in Focus-

Soji Lee:

A Prospect Theory Approach to Sustainable Tourism: Analyzing the Reference-Dependent Evaluation of Destination Authenticity via Online Reviews.

Shogo Tanaka:

Meaning in language and bodily performances: From Merleau-Ponty's perspective.

Toru Hattori, Nana Morizono:

Environmental Cognition and Tourism Behavior from the Perspective of Embodied Knowledge: The Case of Iban Longhouse Tourism.

他 4 報

(2) 投稿論文 2 報

### 「身体性を起点とする学際人文学」班

田中彰吾・篠原聡・山田洋・北條芳隆  
植田俊・安達未菜・東海林恵子・三枝信吾  
白川美冬・守屋朋龍・入來篤史・今宿未悠

本研究班は今年度コアプロジェクト2からコアプロジェクト1に移行した。身体性に関する問題意識を共有しつつ、新たな人文学の構想を求めて学内外のさまざまな企画・イベント・研究会等で議論を行っている。今年度の主な成果は以下の通りである。

(a) 研究会「スポーツ科学 UNIT 研究会」の企画と

開催：スポーツ医科学研究所（所長の山田洋は本研究班メンバー）と文明研究所の合同主催研究会として 2025 年 12 月 10 日、東海大学湘南校舎で開催した。メンバーの三枝信吾が以下の発表を実施した。

・三枝信吾「脳卒中後歩行の身体性と物語性—事例報告からの示唆」

(b) シンポジウム「語る身体、生成する意味—言葉の身体性から人文知を再考する」の企画と開催：前掲の「第 1 回 超領域人文学シンポジウム (2026 年 1 月 24 日、東海大学湘南校舎の一部として実施し、メンバーの田中彰吾、安達未菜、今宿未悠がそれぞれ以下の講演を実施した。

・田中彰吾「メルロ＝ポンティの「語る言葉」から考える言葉の身体性と意味」

・安達未菜「ミストラルが生んだ詩と「語る言葉」—プロヴァンスの音と精神文化」

・今宿未悠「皮膚感覚から共有経験を立ち上げる—詩・パフォーマンス・メディアアートの各形式が生み出すコミュニケーションとその差異」

(c) 学会誌『認知科学』33 巻 1 号の特集「人文学の新しい次元—量子論のメガネで覗く」の編集：メンバーの田中彰吾、入來篤史が特集の担当エディターを務め、以下の論文を寄稿した。

・田中彰吾「生成する実在：身体＝装置の可感性と量子観測の存在論」『認知科学』第 33 巻 1 号, pp. 21-35 (2026 年 3 月)

・入來篤史「経路積分的因果論による進化と歴史の再定式化：分岐した学知の再統合に向けて」『認知科学』第 33 巻 1 号, pp. 55-72 (2026 年 3 月)

・入來篤史・田中彰吾「人文学における認知フレームの量子論的転回」『認知科学』第 33 巻 1 号, pp. 139-144 (2026 年 3 月)

### 『「さわる」ことから感性の多様性を

構想する人文学」

(コア・プロジェクト 2)

### 「美人画の文明論的研究」班

篠原聡・角田拓朗・今西彩子・吉井大門

田中知佐子・田所泰・鬼頭美奈子

美人画の文明論的研究視角から風俗画の再検証を試み、日本近代美術史の再構築を目指して設置された。美人画を含む人物画に関する研究は近代日本画の成立史を再考する上でも重要な研究領域

である。本年度は新たに2名を加え、主に(1)美術館主催の展覧会の調査協力とシンポジウムの開催、(2)尾中廬山に関する基礎的研究(継続)と学会発表の他、これまでの研究成果の一端として(3)外部助成金の獲得(1件)と、2026年度「三菱財団 文化財保存修復事業助成」への申請につながった(写真1)。



写真1

- (1) シンポジウム「映月を考える、映月から考える」(平塚市美術館、2025年10月18日) シンポジウム「次世代日本画研究フォーラム: 星野コレクションの作品を巡って」(海の見える杜美術館、2025年11月9日)
- (2) 学会発表(2025年5月17日)、踏査(2026年1月30日~2月1日、3月15日~17日)
- (3) 2025年度「鹿島美術財団 美術に関する調査研究助成」(研究題目: 尾中廬山の研究)

#### 「ユニバーサル・ミュージアムの実践的研究」班

篠原聡・田中彰吾・堀啓子・西本健吾  
広瀬浩二郎・原礼子・栗川治・田中実紀  
吉村浩一・上田茜・三枝信吾

視覚優位の生活世界のなかで「触覚」の観点から「感性」について考察し、ユニバーサル・ミュージアム(誰もが楽しめる博物館)の実現を構想することを目指して設置された。今年度は新たに3名を加え、(1)村田製作所グループのミライセンスと連携し、大阪万博で話題を呼んだ触覚デバイス「ふるえる石ころ」についてアーティストを交えた情報交換と利活用の検討を進めた(写真2)ほか(2)平塚盲学校との連携による造形活動と

展覧会を開催した。また(3)美術館等のユニバーサルミュージアムの実践に関する美術館、研究団体等のオブザーバーとして協力したほか(4)触る美術鑑賞などのワークショップを開催した。尚、共同研究者が当該プロジェクトに関連する単著・共著を出版(4件)した。これまでの研究成果の一端として(5)研究費 基盤Bの採択(研究分担者)につながった。



写真2

- (1) 2025年7月28日 村田製作所ミライセンス「ふるえる石ころ」体験&意見交換会
- (2) 2025年9月25日、10月23日 平塚盲学校 造形ワークショップ  
2026年1月2日~5月10日 鋸山美術館「彫刻に触れるとき」展
- (3) 2025年7月18日、8月30日、9月25日、10月27日、11月30日(栃木県立美術館)  
2025年11月4日(国立西洋美術館)、2025年8月27日(関東甲信越視覚障害教育研究会)
- (4) 2025年8月9日(北区文化振興財団WS)、2025年12月8日(八ヶ岳美術館WS)など
- (5) 2025年度 基盤B 研究分担者「触覚的感受に基づく彫刻表現論の拡張: 空間把握と身体性が導く能動的鑑賞を求めて(研究代表者: 宮坂慎司)」

#### 「戦争の人間学的研究」班

山本和重・小林元裕  
吉井大門・篠原聡

2022年2月のロシアによるウクライナ侵攻という事態をふまえ、戦争を人文学の見地から多角的に検討することを目的として、2023年度に発足。2024年度までは、コア・プロジェクト1「現代の要請に応える人文科学方法論の探究」に属していたが、2025年度はコア・プロジェクト2「「さわる」ことから感性の多様性を構想する」に移行した。本年度は外部からも報告者やコメンテ

ターを招くなどして、(1) 研究会を3回開催し、充実した議論が行われた。また、班の代表者である山本が、(2) 昭和戦時期の町村兵事資料（敗戦時の焼却処分をまぬがれた書類）についての調査を行い、その成果は、パルテノン多摩ミュージアム企画展「戦争と多摩の人々」の関連講演である「多摩村役場の兵事資料について」や鳥取県立公文書館主催の企画展「兵士と家族―戦争に翻弄された人々の記録」の関連座談会などに結実している（写真3）。



写真3

#### (1) 研究会

第4回研究会（2025年9月19日）

小林元裕（文化社会学部アジア学科）「戦時下の天津・北京」

第5回研究会（2025年11月15日）

山崎紫音（本学文学研究科史学専攻博士課程前期）「1920年代の富士裾野演習場をめぐる陸軍と地域社会」コメンテーター：荒川章二（国立歴史民俗博物館・静岡大学名誉教授）

第6回研究会（2026年3月14日）

吉川由紀（沖縄国際大学非常勤講師、「沖縄戦若手研究会」共同代表）「沖縄戦研究とその継承―非体験世代の取り組み」

#### (2) 調査活動

- ・東京都日野郡多摩村役場の兵事書類についての調査（8月7日、15日、28日、9月25日の4回。於パルテノン多摩ミュージアム）
- ・茨城県那珂郡野口村役場「動員二関スル発来翰綴」等の兵事書類の調査（11月14日、常陸大宮市文書館）

コア・プロジェクト2（全体）

〈開催した研究集会〉7件

1) 美人画班 2件（2025年10月18日、11月9日）

2) ユニバーサル班 2件（2025年7月28日、2026年3月21-22日）

3) 戦争班 3件（2025年9月19日、11月15日、2026年3月14日）

〈発表・講演〉33件

・国内学会発表 3件

・研究会報告・招待講演等（シンポジウムへの登壇含む）30件

〈論文・研究ノート等〉20件

〈学術書・報告書等〉6件

・書籍等出版物5件

・報告書 1件

〈展覧会企画・協力等〉8件

〈ワークショップ〉10件

### 「東海大学所蔵古代エジプト及び

中近東コレクション(AENET)を軸とした  
学術的研究と公開促進  
(コア・プロジェクト3)

山花京子

本プロジェクトは11号館に収蔵されている古代エジプト及び中近東コレクション(AENET)（以下、エジプト・コレクションとする）の活用に関わる環境整備と保全を主たる目的とする。さらに、これらのコレクションを軸に教育普及活動、研究会や講演、シンポジウム等を展開している。2025年度は東海大学ToCoチャレの学生団体であるEgyptian Projectと緊密に連携を行いながら、一般に対する教育普及活動も頻繁に行った。

1) 競争的資金・助成金獲得

a) 科学研究費助成事業 基盤研究C「アケメネス朝期における北部イランを結節点としたファイアンス製品交易についての研究」R7～R10（予定）

b) 鹿島美術財団 出版助成金 『古代エジプトの美術工芸―金属とガラス―』

2) 展覧会への貸出

a) 松前記念館（写真1）

b) 岡山市立オリエント美術館特別展「古代エジプト・ふしぎ発見!」遺物出品と展示解説（写真2）

3) 新規寄贈品受け入れ

a) 大野直樹様より（伝）イラン出土の青釉把手付水差（写真3）

b) 同氏より (伝) アゼルバイジャン出土動物形瓶 (写真4)



写真1



写真2



写真3



写真4

4) 啓蒙・社会貢献活動 (ToCo チャレ Egyptian Project との協同活動)

Egyptian Project は講演会や <sup>ワークショップ</sup> WS を通じて大学が所有する古代エジプトの文化財を紹介し、古代エジプトなど古代史の啓蒙普及に努める学生団体である。2025年度は7月、8月期オープンキャンパス、10月グローバルフェスタ、11月の建学祭にてWSを行ったほか、出張講座として8月には岡山市立オリエント美術館、大根公民館、2026年1月23日には湘南キャンパス近郊のみずほ小学校「パピルス葉と練り香水を作ろう!」を開催した。



写真5

- a) 新潟県三条市図書館パネル解説作成 (写真5)
- b) 大根公民館小学生向けWS、みずほ小学校WS
- c) 岡山市立オリエント美術館特別展「古代エジプト・ふしぎ発見!」WS

5) 共同研究

- a) 収藏品コインのマイクロサンプリング成分分析 (工学部 葛巻徹教授) (写真6)
  - b) 収藏品木製儀式用杖 SK269 の3D計測 (早稲田大学文学学術院考古学コース) (写真7)
  - c) 木製弓矢 名古屋大学環境学研究科との有機物分析 (写真8)
  - d) 古代のやきものファイアンスのバインダー研究 (工学部 秋山泰伸教授)
- 他、コレクション閲覧申請5件



写真6



写真7



写真8

6) 展覧会・研究会・講演会・WS

- a) 「古代エジプトの護符」 松前記念館, 学芸員課程レプリカ制作体験, 2025.07.30
- b) 望星学塾「山花先生と回る ラムセス大王展 ファラオたちの黄金」, 展覧会見学解説, 2025.08.27 (写真9)

望星ゼミナール エジプトシリーズ  
山花先生と回る  
**ラムセス大王展**  
ファラオたちの黄金

今年の望星ゼミナール エジプトシリーズは、現在豊洲で開催されている「ラムセス大王展」を会場に開催。「ラムセス大王の棺」や黄金製品など、エジプト国外初展示の品を含むおよそ180点の展示品を、例年好評の山花京子先生による解説を聞きながら間近で鑑賞します。

展覧会の詳細は右のQRコードよりご覧ください。

8.27 WEDNESDAY 定員10名  
14:00-15:30  
13:45集合予定

山花 京子  
Yamahana, Kyoko  
東海大学文化社会学部  
アジア学科 教授

◆会場：ラムセス・ミュージアム at CREVIA BASE Tokyo (豊洲)  
東京都江東区豊洲6-4-25 現地集合・現地解散

◆受講料：2,000円+ラムセス大王展入場料 (団体平日/3,700円)  
(申し込まれた方には実施要領と振込案内をメールにてお送りします)

<申込み方法>  
以下の①~④を記載の上、メールまたは右のQRコードよりお申込みください。  
①名前・フリガナ ②住所 ③電話番号 (当日連絡のつくもの)  
④メールアドレス ⑤生年月日 (保険加入のため必要となります)

申込受付期間 7月4日 (金) 10:00より受付開始

申込締切日7月18日 (金)

【お申込み・お問合せ】  
学校法人東海大学望星学塾 〒180-0013東京都武蔵野市西久保1-17-1  
TEL:0422-51-0161 FAX:0422-53-1025 E-MAIL: basei@tokai.ac.jp 受付時間 (月~金 9:00~17:00)

写真9

- c) 資格教育センター学芸員課程 シンポジウム「コレクションの魅力 いま、ふたたびコレクションに触れる」, 松前記念館主催, 2025.12.13

「アンデス・コレクションの  
学術的研究と公開促進」  
(コア・プロジェクト4)

吉田晃章

<新規・継続研究：4件>

- 1) 「東海大学アンデス・コレクションの笛吹きボトル

のタイプ分類」2021年度より継続研究 東海大学・放送大学・岡山県立大学・BIZEN 中南米美術館

- 2) 「X線CTを活用した東海大学アンデス・コレクションのワウラ様式土器の胎土と図像研究」2024年度より継続(市木尚利研究員との共同研究)
- 3) 「ポータブル蛍光X線分析計を使用した東海大学アンデス・コレクションの金製品の分析と研究」2025年度より新規 学内共同研究(マイクロ・ナノ研究開発センター)、担当科目「文明論の展開」との連携(学生参加)
- 4) 「X線CTによる布製品の分析と研究」2025年度より新規、学内共同研究(マイクロ・ナノ研究開発センター)。

<講演・シンポジウム：2件>

- ・“EL VIAJE DEL SONIDO:estructuraacústica y morfología de la botella silbadora”, Mau Macedo (Profesor de Universidad de PrefecturaOkayama) yTeruaki Yoshida (Profesor de Universidad Tokai, Investigador de Instituto de Civilización, y de Centro de Investigación Micro-Nano) Jueves, 15 de agosto de 2025, Museo de Arte precolombiano Casa del Alabado.



- ・「東海大学アンデス・コレクションの活用実践報告ー学内における研究教育と学外ワークショップなどからコレクションの魅力伝える」、公開シンポジウム『コレクションの魅力

ー今ふたたびコレクションに触れる』文明研究所主催、資格教育センター・松前記念館共催、2025年12月13日(土)

## 公開シンポジウム

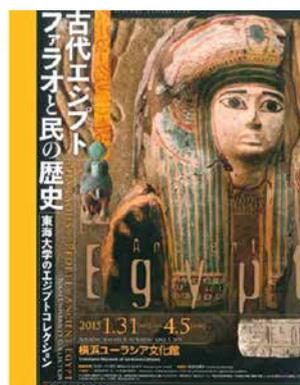
2025. 12. 13 (sat)

13:30-16:50

8号館401教室

東海大学湘南キャンパス

13:30- 開場 水島久光(松前記念館館長)  
 13:40- 基調講演 森下矢須之(BIZEN中南米美術館館長)  
 14:20- (休憩)  
 14:30- パネル報告  
 ①池田晃章(文学部文学学科教授)  
 ②山花京子(文化社会学部アジア学科教授)  
 ③広瀬浩二(国立民族学博物館教授)  
 15:35- (休憩)  
 15:45- ディスカッション  
 田中実紀(松前記念館学芸員) + 登壇者  
 16:45- 閉会挨拶 大島宏(資格教育センター長)  
 司会/コーディネーター: 藤原誠(資格教育センター/松前記念館)



<学会発表・学術集会発表：4件>

- ・吉田晃章(東海大学文学部)・真世土マウ(岡山県立大学)・鶴見英成(放送大学教養学部)・森下矢須之(BIZEN 中南米美術館)「ペルー天野プレコロンビアン織物博物館資料に基づく笛吹きボトルのタイプ分類再考」古代アメリカ学会第30回研究大会 2025年12月6日～12月7日、国立民族学博物館。
- ・真世土マウ(岡山県立大学)・吉田晃章(東海大学文学部)・鶴見英成(放送大学教養学部)・森下矢須之(BIZEN 中南米美術館)「笛吹きボトルの形態と音色の変化に関する比較研究：エクアドル資料調査を中心に」古代アメリカ学会第30回研究大会 2025年12月6日～12月7日、国立民族学博物館。
- ・吉田晃章(東海大学文学部)・真世土マウ(岡山県立大学)・鶴見英成(放送大学教養学部)・森下矢須之(BIZEN 中南米美術館)「ペルーとエクアドルの資料に基づく笛吹きボトルの形態及び音響特性の研究とタイプ分類再考」マテリアマインド第4回全体会議 2026年1月10～11日、慶応義塾大学。



授業での活用

- ・吉田晃章「文明研究所所蔵アンデス・コレクションにおける笛吹きボトル資料群の特徴 ―ペルー博物館資料群との比較考察―」東海大学文明学会研究大会、2025年10月4日（土）、東海大学湘南キャンパス。

<発表・講演：1件>

- ・海外招待講演1件
- ・シンポジウム1件
- ・国内学会・学術集会での発表4件

<執筆：1件>

巻頭言「幾何学的な形状の笛吹きボトルをめぐって」、『文明』第36号、pp.iii-vi。

<企画展示：1件>

- ・松前記念館歴史と未来の博物館2025年度企画展「松前重義のユートピア 建学の源流を構成する10のピース」アンデス・コレクションのコーナー展示（2025年4月1日～2026年3月5日）

<ワークショップほか開催：3件>

- 1) 横浜市歴史博物館ワークショップ「笛吹きボ

- トル制作ワークショップ」（2025年5月18日）
- 2) 大阪北視覚支援学校「笛吹き制作ボトルワークショップ」（11月28日、12月5日、1月16日計3回）

- 3) 文明学科科目「文明論の展開」で蛍光X線分析計を使用し、金製品の研究教育（演習）を実施。

<獲得した外部研究費：1件>

- ・吉田晃章（分担・継続）、学術変革領域研究（A）「マテリアマインド：物心共創人類史学の構築」研究項目B02「認知科学と人類史学との協働による創造的人工物生成過程の解明（アートと感情班）」代表：川畑秀明、分担者吉田晃章ほか「笛吹きボトルの構造に関する研究」、2025年度分担金：2,300千円、（2024～28年度）

<記録映像作品：2件>

- 1) 大阪府立大阪北視覚支援学校「笛吹き制作ボトルワークショップ」記録映像作品  
東海大学アンデス・コレクションWebSite (<https://andes.civilization.u-tokai.ac.jp/news/2766/>) に3本掲載。【ロングバージョン動画（8分スペイン語字幕付き）】<https://vimeo.com/1115445732/c95c472a93?share=copy> ほか
- 2) 大阪府立大阪南視覚支援学校「笛吹き制作ボトルワークショップ」記録映像作品（編集中心）

<ホームページ>

東海大学アンデス・コレクションホームページの更新

## 所員の活動

### 田中 彰吾

文明研究所長、文化社会学部・教授

【執筆】

- 田中彰吾、AIとフレーム問題、記号接地問題、身体性。大木充・小田登志子・岩根久編『AIを外国語教育で使わない選択肢はもうない』（第5章、pp.91-103）、ひつじ書房、2025年8月
- 河野友勝・田中彰吾。注意欠如・多動症（ADHD）の身体性研究の鳥瞰図をえがく：「生きられた身体」の現象学的視点から。『認知科学』第32巻第3号、pp.412-435。2025年9月。<https://doi.org/10.11225/cs.2025.021>
- Katsunori Miyahara, Shogo Tanaka. Narrative Imprisonment. Topoi: An International Review of Philosophy. 2025年11月。<https://doi.org/10.1007/s11245-025-10301-5>
- 田中彰吾。生成する実在：身体＝装置の可感性と量子観測の存在論。『認知科学』第33巻第1号、pp.21-35。2026年3月。
- 田中彰吾・入来篤史。特集「人文学の新しい次元－量子論のメガネで覗く－」趣旨と構成。『認知科学』第33巻第1号、pp.3-6。2026年3月。
- 入来篤史・田中彰吾。人文学における認知フレームの量子論的転回。『認知科学』第33巻第1号、pp.139-144。2026年3月。

【報告・講演】

- Shingo Mitsue, Shogo Tanaka, Suzuki Natsuki, Shinichi Shimada, Shu Morioka. The meaning of independence in walking for patients with subacute stroke: An interpretative phenomenological analysis. World Physiotherapy Congress 2025, Tokyo, Japan. 2025年5月30日。
- 田中彰吾「身体性から見た対話の「場」の構成」、日本心理学会第89回大会・公募シンポジウム「哲学対話の身体性とエビデンスを求めて」、

## 所員の活動

東北学院大学, 2025年9月5日.

- 田中彰吾「「生きられた身体」のリハビリテーション」, 佛教大学保健医療技術学部講演会, 佛教大学, 2025年10月22日.
- Shogo Tanaka. The developing body image: A phenomenological exploration. Lecture at the Department of Philosophy, University of Memphis, Memphis, USA. 2025年11月3日.
- 田中彰吾「人間っぽいエージェントとの共生を考える」, 東海大学・中部大学 地球市民セミナー「AI×身体×脳: 身体を持ったAIと人間の共進化」, 中部大学, 2025年12月13日.
- 田中彰吾・近藤和敬「哲学の勉強会・報告」, JST-CREST「マルチセンシング」領域会議, 北海道大学, 2025年12月18日.
- 田中彰吾「「あいだ」の知性: AI時代における人間と技術の共進化」, 学術変革領域A「マテリアマインド」公開シンポジウム「心と身体×過去と未来」, 慶應大学, 2026年1月11日.
- 田中彰吾「メルロ＝ポンティの「語る言葉」から考える言葉の身体性と意味」, 文明研究所「超領域人文学シンポジウム」, 東海大学, 2026年1月24日
- Shogo Tanaka. The self as Aida (Betweenness): Toward a non-reductive framework of self CREST-ANR Narrabody 1st International Conference, Beaujolais, France. 2026年3月6日.

【その他】

- Phenomenology and the Cognitive Sciences (Springer), Editorial Committee Member に就任 (2025年6月～)
- 文化放送「ReHacQ R 大学 教養学部」出演 (2025年12月30日, 2026年1月6日放映), 動画: [https://www.youtube.com/watch?v=nRmwRBe\\_Tjc](https://www.youtube.com/watch?v=nRmwRBe_Tjc)

## 山花 京子

文化社会学部アジア学科・教授

【執筆・翻訳】

- 山花京子他, 「ツタンカーメンの謎」, 2025年6月25日, 『三田論評』、慶応義塾大学出版会, ツタンカーメンの謎 | 三人閑談 | 三田評論 ONLINE
- Kyoko Yamahana, Ohara Museum of Art: Art and Architecture, 2025 英語版収蔵品目録, 分担執筆, pp.176 – 182, (2026.03 刊行予定)
- 山花京子, 「東海大学所蔵古代エジプト及び中近東コレクション (AENET) の保存と活用の現状」, 『西アジア考古学』 第27号, 日本西アジア考古学会 (2026.03 刊行予定)
- 山花京子, 「巻頭言」, 大原芸術研究所, 大原美術館特別展覧会『1925 展』図録
- Kyoko YAMAHANA and Yasuyuki MIYAZAWA, “A Pioneering Archaeometric Study on Detecting Ancient Brazing Using Synchrotron X ray CT: Comparative Analyses of Metal Artifacts from Ancient Egypt and the Andes; シンクロトロン X 線 CT による古代ろう付け検出の先駆的考古学的研究: 古代エジプトとアンデスの金属製品の比較分析”, SPring-8/SCALA 利用研究成果集, (2026.03 刊行予定)

【学会発表】

- 山花京子, 「東海大学所蔵古代エジプト及び中近東コレクション (AENET) の保存と活用の現状」, 日本西アジア考古学会 2025年6月21日 於東海大学湘南キャンパス 口頭発表
- YAMAHANA, Kyoko, “Whose Face is this? – Identification of a Faience Inlay at MIHO MUSEUM, Oral Presentation, 23rd International Congress of the Association Internationale pour l’Histoire du Verre, Mainz, Sept.8.
- YAMAHANA, Kyoko, and AKIYAMA Yasunobu, “The Use of Binding Medium in Making Ancient Egyptian Faience,” Poster Presentation, 23rd International Congress of the Association Internationale pour l’Histoire du Verre, Mainz, Sept.8.
- 第50回 古代エジプト研究会 文明研究所後援 (2025年11月29日) 東海大学品川キャンパス

## 吉田 晃章

文学部文学部・教授

【執筆】

- 吉田晃章「巻頭言—幾何学的な形状の笛吹きボトルをめぐる—」, 『文明』 第36号, pp.iii-vi, 2025年3月31日, 文明研究所
- 吉田晃章「東海大学アンデス・コレクションの活用実践報告」, 公開シンポジウム報告書『コレクションの魅力—今ふたたびコレクションに触れる—』, pp.8-12, 東海大学資格教育センター・松前記念館

【講演・シンポジウム】

- Macedo, Mau y Teruaki YOSHIDA “EL VIAJE DEL SONIDO:estructuraacústica y morfología de la botella silbadora”, Mau Macedo (Profesor de Universidad de PrefecturaOkayama) yTeruaki Yoshida (Profesor de Universidad Tokai, Investigador de Instituto de Civilización, y de Centro de Investigación Micro-Nano) Jueves, 15 de Agosto de 2025, Museo de Arte Precolombiano Casa del Alabado.
- 「東海大学アンデス・コレクションの活用実践報告—学内における研究教育と学外ワークショップなどからコレクションの魅力を伝える」, 公開シンポジウム『コレクションの魅力—今ふたたびコレクションに触れる—』 文明研究所主催、資格教育センター・松前記念館共催, 2025年12月13日 (土)

【学会発表・学術集会発表】

- 吉田晃章 (東海大学文学部)・真世土マウ (岡山県立大学)・鶴見英成 (放送大学教養学部)・森下矢須之 (BIZEN 中南米美術館)「ペルー天野プレコロンビアン織物博物館資料に基づく笛吹きボトルのタイプ分類再考」古代アメリカ学会第30回研究大会 2025年12月6日～12月7日, 国立民族学博物館
- 真世土マウ (岡山県立大学)・吉田晃章 (東海大学文学部)・鶴見英成 (放送大学教養学部)・森下矢須之 (BIZEN 中南米美術館)「笛吹き

ボトルの形態と音色の変化に関する比較研究：エクアドル資料調査を中心に「古代アメリカ学会第30回研究大会 2025年12月6日～12月7日、国立民族学博物館

- 吉田晃章（東海大学文学部）・真世土マウ（岡山県立大学）・鶴見英成（放送大学教養学部）・森下矢須之（BIZEN 中南米美術館）「ペルーとエクアドルの資料に基づく笛吹きボトルの形態及び音響特性の研究とタイプ分類再考」マテリアマインド第4回全体会議 2026年1月10～11日、慶応義塾大学
- 吉田晃章「文明研究所所蔵アンデス・コレクションにおける笛吹きボトル資料群の特徴 ―ペルー博物館資料群との比較考察―」東海大学文明学会研究大会、2025年10月4日（土）、東海大学湘南キャンパス

#### 【その他の活動】

- 2025年度文明学科開講科目「文明論の展開」で蛍光X線分析計を使用し、収蔵品である金製品の研究教育（演習）を実施
- 松前記念館歴史と未来の博物館 2025年度企画展「松前重義のユートピア 建学の源流を構成する10のピース」アンデス・コレクションのコーナー展示（2025年4月1日～2026年3月5日）
- 横浜市歴史博物館で「笛吹きボトル制作ワークショップ」を実施（2025年5月18日）。「アンデス考古学と笛吹きボトル」について講義
- 大阪府立大阪南視覚支援学校で「笛吹きボトル制作ワークショップ」を実施（2025年11月28日、12月5日、2026年1月16日）。初回、「考古学とアンデス文明」について講義

## 篠原 聡

資格教育センター・准教授、学長室（松前記念館担当）課長・学芸員

#### 【執筆】

- 篠原聡「マドンナのまなざしを超えて 映月、戦後の葛藤」（『北澤映月』展図録、平塚市美術館、2025年10月11日）
- 篠原聡「触覚の探究―ユニバーサル・ミュージアムの実現を目指して」（『美術館と学芸員4 学芸員課程講義録』、東京造形大学、2026年3月刊行予定）
- 篠原聡「ユニバーサル・ミュージアムの新展開」（『彫刻をさわる時間』報告書、日本大学芸術学部、2026年3月）
- 篠原聡「触覚の記憶 彫刻メンテナンスから / 彫刻メンテナンスへ」（『石膏「模」像とはなにか―石膏像をさわりながら考える』報告書、筑波大学芸術系、2026年3月）
- 篠原聡「栃木県立美術館《ペネロペ》“メンテナンス”と“さわる鑑賞”」（『屋外彫刻調査保存研究会通信 No.74』、屋外彫刻調査保存研究会、2026年2月）
- 篠原聡「尾中廬山の資料」（『紫陽花』第9号、美人画研究会、2026年3月）
- 『コレクションの魅力 いまふたたび大学コレクションに触れる』シンポジウム報告書（松前記念館、2026年3月）

#### 【研究発表・報告・講演等】

- 学会発表「尾中廬山の戦争画 浮世絵系画家が描く戦争の狂気」（2025年度第1回美学会東日本部会例会、東京大学、2025年5月17日）
- シンポジウム「パブリックアートは私たちのもの？」（藤沢市アートスペース、2025年6月8日）司会
- 講演「美人画の系譜と浮世絵末流の近代」（令和7年度市民大学、秦野市教育委員会、2025年10月4日、25日）
- シンポジウム「映月を考える、映月から考える」（平塚市美術館、2025年10月18日）パネリスト
- シンポジウム「次世代日本画研究者フォーラム：星野コレクションの作品を巡って」（海の見える杜美術館、2025年11月9日）パネリスト、コーディネーター
- シンポジウム「彫刻をさわる時間―触覚にとって美とはなにか」（企画展「さわる」と「みる」の結節点、千葉県立美術館、2026年2月15日）司会

#### 【その他の活動】

- ユニバーサル・ミュージアム勉強会（栃木県立美術館、2025年7-10月）講師
- アクセシビリティ・ワーキンググループ（国立西洋美術館、2025年11月4日）オブザーバー
- ワークショップ「造形制作&彫刻メンテナンス」（北区文化振興財団、2025年8月9日）講師
- 関東甲信越視覚障害教育研究会（神奈川県立平塚盲学校、平塚市美術館、2025年8月27日）講師
- 神奈川県立平塚盲学校との連携による造形授業の実践（東海大学資格教育センター、2025年9月25日、10月23日）コーディネーター  
協力：JSPS 科研費 JP25K00422 の助成を受けた研究・取組および筑波大学芸術系と共栄製鋼株式会社による共同研究「アートの視点によるサステナブルな建築鋼材の可能性開拓」
- ワークショップ「清水多嘉子の彫刻を触ろう！」（八ヶ岳美術館、2025年12月8日）講師

## 服部 泰

観光学部観光学科・講師

#### 【執筆】

- 平野葉一、服部泰、中村朋子、渡辺青、「文明論の系譜(1)～東海大学文明研究所と文明論」、『文明』、No. 36、2026年（3月予定）。
- Toru Hattori, Yuki Takatori, Nana Morizono, Yoichi Hirano: "International Symposium Report: The 6th Dialogue between Civilizations: Diversity through different lenses," Civilizations, No. 37. 2026（3月予定）。
- Toru Hattori, Nana Morizono, "Environmental Cognition and Tourism Behavior from the Perspective of Embodied Knowledge: The Case of Iban Longhouse Tourism," Civilizations, No. 37. 2026（3月予定）。
- (共著)『令和7年度 長生村移住交流体験事業報告書』(3月予定)。

#### 【報告・講演】

- Toru Hattori, Yoichi Hirano, Takuo Nakashima, Mina Adachi, Hota Moriya, "Consideration of the concept of "environment-related Quality

## 所員の活動

of Life (eQOL)" in the local society — from the perspective of human relationships in the community —, ICICI2025(19th International Conference on Innovative Computing, Information and Control) (Kitakyushu International Conference Center), 28 Aug 2025.

- 服部泰、森園奈央、「身体知から考える環境認知と観光行動：イバン・ロングハウス観光を例に」、第1回超領域人文学シンポジウム（東海大学）、2026年1月24日。
- 服部泰、「総括・熱海エコムゼオ構想」、地域と学生をつなぐ産官学連携プロジェクト熱海 成果発表会、(熱海市役所)、2025年12月14日。
- 服部泰、「発表総括および今後の展開」、リサーチで見た村づくり 学生たちが本気で考えた地域活性アプローチ報告会（長生村交流センター）、2026年2月4日。

### 【その他】

- 「長生村移住交流体験事業」における産官学連携のためのフィールドワークおよび提案の実施(千葉県長生郡長生村、㈱エイチ・アイ・エスとの共同)。
- 「地域と学生をつなぐ産官学連携プロジェクト 熱海」における産官学連携のためのフィールドワークおよび提案の実施（一般財団法人熱海観光局、㈱JTB 商事との共同）。
- 石川県鳳珠郡能登町「のと寒ぶりまつり 2026」（2026年1月18日）における連携事業の運営。
- 石川県鳳珠郡能登町鶴川地区「にわか祭」（伝統的祭礼）の保護活動。

## 安達 未菜

文明研究所・特任助教

### 【執筆】

- Mina Adachi, "le poème produisant de Mistral et la parole parlante: la sonorité et l'esprit culturelle provençale" *Civilizations*, No. 37. 2026 (3月予定) .
- 安達未菜「地中海地域圏におけるラテン民族の協同」2025年度東海大学連合後援会研究助成、ポスター、2025年10月31日
- 安達未菜「西ヨーロッパ地中海地域圏の汎ラテン主義思想——プロヴァンスとカタルーニャの連盟」TOKAI Research Collab2025、ポスター、2026年2月20日
- 安達未菜「巻頭言 平和構築のための文明知を求めて」『東海大学文明研究所所報 2025』2026年3月

### 【報告・講演】

- 安達未菜「ミストラルが生んだ詩と「語る言葉」——プロヴァンスの音と精神文化」2025年度東海大学文明研究所シンポジウム、2026年1月24日
- 安達未菜「西ヨーロッパ地中海地域圏の汎ラテン主義思想——プロヴァンスとカタルーニャの連盟」TOKAI Research Collab2025、2026年2月20日

### 【その他】

- 2025年度東海大学連合後援会研究助成採択（2025年2月）
- 2025年度東海大学文明研究所主催「第1回 超領域人文学シンポジウム」を東海大学湘南キャンパスで開催、企画・運営に携わる（2026年1月24日）
- 株式会社東海教育研究所「かもめの本棚」にてエッセイ「ミストラルの面影を探して」連載（第1回「ミレイユとの出会い」2025年7月掲載、第2回「ミストラルと私—修業時代」2025年8月掲載、第3回「マイヤヌ市、再訪」2025年9月掲載、第4回（上）「書簡から読み解くミストラルの素顔——恋愛」2025年10月掲載、第4回（下）「書簡から読み解くミストラルの素顔——こころ」2025年11月掲載、第5回「ミストラル祭に参加して——マイヤヌの「村おこし」」2025年12月掲載、第6回「ミストラル晩年の夢——アルル民俗博物館設立」2026年1月掲載、第7回「受け継がれる民衆文化——物をして語らしめよ」2026年2月掲載、第8回「先駆的な活動——生きる文化の展示」2026年3月掲載）
- 株式会社東海教育研究所「東海大学新聞」コラム：リレーエッセイ掲載（「ゴッホが南仏に見た日本の片鱗」2025年5月掲載、「フレデリック」と「ミストラル」2025年8月掲載、「闘争と静寂のはざままで」2025年11月掲載、「わたしと山椒魚」2026年2月掲載）

## 白川 美冬

文明研究所・特定助手

### 【執筆】

- 「弥生文化の暦を描いた可能性のある壺」『日本考古学』第60号、日本考古学協会、41-58頁、2025年6月、(共著:北條芳隆・白川美冬)
- 「方形周溝墓からみた朝日遺跡の方位観」しだみゅー歴史講演会配布資料、1-10頁、2025年7月
- 「考古資料から民俗方位を捉えるための一試論」『ポラリス—北條芳隆先生退職記念論集—』、341-350頁、2026年1月
- 「朝日遺跡から出土したパレススタイル土器群の性格」朝日遺跡学生フォーラム配布資料、1-10頁、2026年2月
- 『弥生・古墳時代における民俗方位の考古学研究』博士論文、東海大学大学院、2026年3月
- 「朝日遺跡出土パレススタイル土器群の基礎的研究」『あいち朝日遺跡ミュージアム研究紀要』第5号、1-12頁、2026年3月刊行予定
- 「中山32号古墳の墳丘測量調査成果、中山33号墳の墳丘測量調査成果、中山34号墳の墳丘測量調査成果、中山35号古墳の墳丘測量調査成果、中山56号古墳の発掘調査成果、中山74号古墳の墳丘測量調査成果、中山75号古墳の墳丘測量調査成果、中山北尾根1号古墳の測量調査成果、中山北尾根2号古墳の測量調査成果、中山北尾根3号古墳の調査成果」『長野県松本市弘法山古墳発掘調査報告書』、2026年3月刊行予定

### 【報告・講演】

- 「方形周溝墓からみた朝日遺跡の方位観」しだみゅー歴史講演会、歴史の里しだみ古墳群ミュージアム、2025年7月
- 「真田・北金目遺跡群から塚越古墳へ—方形周溝墓出土土器からみた弥生時代後期後半から古墳時代前期の動向—」西相模考古学会、東海大学湘南校舎、2025年9月

- 「真田・北金目遺跡群から古墳時代像をみなおす」、Tokai Research ColLab 2025 ポスター報告、東海大学湘南校舎、2026年2月
- 「朝日遺跡から出土したパレススタイル土器群の性格」朝日遺跡学生フォーラム、朝日遺跡ミュージアム 2026年2月

【受賞】

- 2024年度豆谷和之弥生文化賞(論考部門)受賞
- TOKAI Research ColLab2025(教職員の部)ポスター賞受賞

【その他活動】

- 島根県山城二子塚古墳・岩屋後古墳のレーダー探査(島根県古代文化センターと共同、9月3日～6日)

## 三枝 信吾

文明研究所・特定研究員

【執筆】

- Shingo Mitsue, Tatsuya Ogawa, Yuji Minamikawa, Shinichi Shimada, Shu Morioka. Perceived importance of walking among hospitalized patients with stroke: a thematic analysis. *Front Neurol.* 17:1742132. 2026.

【学会発表】

- Shingo Mitsue, Shogo Tanaka, Natsuki Suzuki, Shinichi Shimada, Shu Morioka. The Meaning of Independence in Walking for Patients with Subacute Stroke: An Interpretative Phenomenological Analysis. *World Physiotherapy Congress 2025, Tokyo.* 30 May 2025.
- Shingo Mitsue, Shogo Tanaka. Understanding the Experience of Gait Rehabilitation in Stroke Survivors: A Phenomenological Study. *The 42nd International Human Science Research Conference, Roskilde.* 14 August 2025.
- 三枝信吾. 入院中の脳卒中者における上肢の物語性—リハビリテーションに取り組む二症例に基づく検討—. *日本質的心理学会第22回大会*, 広島. 2025年10月18日.
- 三枝信吾, 田中彰吾, 甲斐匠, 高村優作, 嶋田総太郎, 森岡周. 脳卒中後の歩行に関する経験の構造: 現象学的アプローチによる縦断事例研究. *第23回日本神経理学療法学会学術大会*, 石川. 2025年10月31日.
- 三枝信吾, 甲斐匠, 森岡周. 入院中の脳卒中者における上肢経験の変容過程 - 二症例に基づく比較的アプローチ -. *第25回認知神経リハビリテーション学会学術集会*, 大阪. 2025年11月30日.

【講演】

- 嶋田総太郎, 東美由紀, 大住倫弘, 三枝信吾, 田中彰吾. 身体とナラティブの相互作用, 脳卒中リハビリテーション過程におけるナラティブ・エンボディメント担当. *日本認知科学学会第42回大会*, 東京. 2025年9月13日.
- Shingo Mitsue, Shogo Tanaka. Embodiment and Narrativity in Post-Stroke Walking -A Longitudinal Qualitative Study-. *CREST-ANR Narrabody 1st International Conference, Beaujolais.* 5 March 2026.

## 重村 つき

文明研究所・特定助手

【執筆】

- 「養老律令における流刑規定の特質」(『東海史学』60、2026年3月刊行予定)

【口頭発表】

- 「律令格式における流刑規定の特質」(新古代史の会、2025年9月27日)
- 「院政期から鎌倉初期の寺社訴訟に基づく流刑について」(公益信託松尾金蔵記念奨学基金同窓会明翔会第5回研究報告会、2025年11月8日)
- 「中世前期の寺社訴訟に基づく流刑と恩赦」(東京大学中世史研究会、2026年1月28日)

【ポスター発表】

- 「日本古代・中世の流刑について」(TOKAI Research ColLab2025、2026年2月20日)

【その他】

- 公益財団法人サントリー文化財団「2023年度若手研究者のためのチャレンジ研究助成」(2024年4月～2025年3月)採択課題「日本古代・中世における流刑の本質および社会的機能に関する研究」成果報告書(2025年10月、サントリー文化財団HP掲載)

## 上田 茜

文明研究所・特定助手

【口頭・ポスター発表】

- 「三島由紀夫『仮面の告白』を辿る」、Tokai Research ColLab 2025 ポスター報告、東海大学湘南校舎、2026年2月
- 「三島由紀夫『仮面の告白』論—主人公「私」の「不安」について—」、東海大学文学研究科日本文学専攻修論発表・研究発表会、東海大学湘南校舎、2026年2月

### 編集後記

研究は苦勞も多いですが、形ある成果となったときの喜びはひとしおです。一つ一つの業績の裏にある地道な探究活動に思いを馳せつつ、文明研究所の一年を振り返りました。(重村つき)

文明研究所に所属して一年が経ちました。今年度は教員としてや研究対象のインプットに注力した為、来年度はアウトプットとして論文執筆に勤しむ思いです。(上田茜)



東海大学文明研究所所報 2025

発行人 田中彰吾

発行日 2026年3月31日

発行所 東海大学文明研究所

神奈川県平塚市北金目 4-1-1 〒259-1292 tel.0463-58-1211 ext.3261・4426